



重修真書太閤記

六編  
十

~13  
459  
60



り  
ほ



重修真書太閤記六編卷之廿八

安國寺惠瓊易道之事  
并毛利家陣中相談之事



爰こゝ小藝州廣鳴の城下の安國寺惠瓊と云ふ僧の何んり元來藝州  
沼田郡金山城主武田刑部少輔信末の末子幼名竹若九と  
云ふ一の禪寺乃弟子とふ日薙髮一之慎藏主と号す一京の東  
福寺の掛錫一之け也

一書の藝州沼田郡豊良村土民の子十一歳東福寺の入  
之薙髮一惠瓊字瑤甫と云ふ何んり  
器量發明の性質ふれハ學頭の也登るへきふれと身持

特 18  
門 459  
巻 60

大岡巴六編卷之廿八

大層言ふ事ありて  
よろしやくはよりて遂に寺内を退出され故郷ふれハ藝  
州へ歸るへなれと攝津播磨備前備中備後の五國をへた  
てて行程見てハ百里ハおろし路費の貯ふけれハそれも  
叶を以て止正を得て三條大橋の橋詰ハいさゝかの圍を  
のらひ編笠もて顔をかくし手の筋人相を判断しそり  
の酒錢を得て其日を送りけるハ其頃羽柴筑前守いさ  
木下藤吉郎とて足輕勤の時八幡へ年籠の御使ハ登山  
ける次京都ハ出らさけるハ不圖三条のそりを通り  
かの圍を見付たふち立寄手の筋を見せ次ハ相を見せ  
しハ惠瓊ハくくとうちふかめ手を打つへハ眼鏡をあ  
ててこれをみるハ掌ハ中指の中心より手くひハ至る

さて絲を引たる如く一條の筋有りこれを人皆知天下  
筋と云ささる面貌をみるハ猿ハ似て眼黄色をふく重瞳  
あり惠瓊是を觀をりち藤吉郎の衣服身の廻りを能  
見るハいづハ遠國のものらしく然も二刀をハ佩たれ  
とも足輕とおろし草鞋破きて跣ハ似たり竹笠損して  
日を蓋ふまたえは志川のハ藤吉郎ハむかひ御身の手筋  
をよひ相形を以て考ふれハ天下の権柄を執りハへき程  
の性分顯然たれそふとふく立身志すハへハ不思議の御  
人体ハあつと歎息志けは藤吉郎大ハ悦びこの身の立身  
法印のいそる通りあつハ如何ハ禮謝をささる  
れとも見らるく正く貧賤ハしてたくえへと不ハ重ねて

報答の時も有へーと云々立出ける影のいまたかくれぬ  
かとあるふ法印觀相の書物をとつゝ鴨河ふあけうらん  
と云藤吉郎これを見とりめ立ちへり何故に左様なハ  
一ゆふそと問ハ法印こたへさく我この処又出さ日  
日多くの人を相見るふいよさ一人も見損さ一正於一さ  
れハ人も我いふ正を頼ミ我も言のあやまたはるを  
樂ミ一ふ今日御邊の相おおいゝ我更ふ不審を起一か川  
相書の信をへつゝ今まで中里一とおもひ一ハ偶中  
一と眞は相形の志る一何るふあらさる正を弁へ知たり  
よりて明日より相を見る正を止んと欲以故にこの虚妄  
の書を川ふあか一しててる形りといふ藤吉郎からくと

打らひ法印よく相を知といへとも其相のあたる時何  
る正を知法印我立身一凡人の至極にいたるへーと  
いふ我心は法印のいするゝ処までいたる正かたかるま  
一とおもふとといへハ法印いそくあ珍敷正をきくも  
のかるいりふ一さか御足輕ふハさふとの處まで立身か  
たかるま一とおもふとといへは是あそ其相形の志る一に  
いへきり拙僧いまた其意を得たと云藤吉郎いそく其事  
也相形ハ其人の一生を流く一て後其當否を知へー我  
いま三十ふたは何と一て其天稟得一處を盡くへ  
らんやかつ凡人の至極と云ふ品々あるへー抑我邦上  
代の昔より今日不至るまゝかえらせあふ正あき天子

大層言つたふえさハ

三

小ま一すは孝くし天子乃御中みかども急度御總領きやくどごうりやうも御  
 相續さうぞくと申にもあらせられ或ハ御二男御三男ごになんごさんも御  
 末子御孫御曾孫すえごそごの等々らうらうおえ一すはそれハ次てハ攝政せつせい関  
 白しやく是また直人ちやくじんのおもひかくへきにあらば其次ハ將軍其  
 次ハ管領くわんりやうその次ハ大名だいめいなり大名の中なまのちゆうハ一國の主なり二  
 國三國の主あり乃至十國餘を領する人もあり王威わういさか  
 んおこふは行を致く時節じせつよゆえ一村一郷の主むらごうのぬしもあるとて  
 もまよふかたあるへ此節このせつの如きハ人々の心次第こころしだいそ  
 らき次第しだい昨日きのうまで油桶あぶらづかを扱あつかまかけ荷にがひ賣うせしものか  
 一國の主とふりし齋藤道三さいとうみちさん入道にゅうだうのため一もあり都みやこ小住  
 かねてえ多くと駿河國しゆんがこくも浪人なみのりせしものか人の力をか

里て人の國を切取終きりとりしゆうり関東の八國を平均へいぐんせし北条早雲  
 もあま控ひかもく異國いこくの例たとをいそ今大明いまたいめいの天子てんしの先祖せんぞも  
 十七歳じちさいみへ父母ふぼ兄あにもよけれせんあたらきに寺てら小入せうに僧そう  
 とけり廿四歳じふしさいの時軍ときぐんをおこし四十一しじゅういちもて天子とけり  
 ときく某そのとても只今ただいまも御覽ごらんの如き足輕あしやうなりぬれとも足  
 輕あしやうもて我一生われいっせいを今此いまこゝ終しゆうに終るへきや氣きの短たんかき法印ほふいんあ  
 るといえられハ惠瓊ゑいけいもひ驚歎おどろたん一我誤われあやまてましく天  
 晴はれ御邊ごへんハ大才子だいさいし相形さうがうのたられぬものも又ハ智惠ちゑも  
 器量きりやうも天下一てんかあまさぬ末すえもたのちけれはとめむへ  
 や御足輕ごあしやうも後のちも小い御見忘ごんみわすれもいへ其時そのときの志  
 る一は是を參まへらさんと輪袈裟りんけさを取て贈おくりしと其後そのち惠瓊

ハ藝州の飯尾安國寺に住しけるか相形も妙を得しとて  
毛利三家をよめ其支族門葉これを尊崇せしかハ今度  
輝元朝臣吉川小早川の兩大将五月十二日出陣ありて備  
中高松後援のため廂山に宿陣のよを聞陣見廻とて  
來りし兄部川の堤の大造るを見ていさける處へ筑  
前守諸陣巡視のため通里ゆられける先拂の侍見答  
め是を捕て筑前守の前より引もてゆく筑前守見るとその  
お侍ともを遠さけやあいりし三茶橋まで見参し足  
輕の羽柴筑前守とありし其時の架装をそのま  
取め置り知天下の筋の志るし七立の里志せや何とて  
法印の爰に來りしやと問て惠瓊より上よく見れ

ハ何さむむか見たりし足輕なり筑前守法印こゑたへ  
來られよとて陣中へともあり鑑横よりかの輪架装を出  
し是を見せ互にむかをわたりいさけるし時を移  
しけるか惠瓊また様君みかかくの如く御立身ありて播  
州姫路の御城主とあらせしれ信長公の御代官として中  
國靜謐の御大将とあらせむひ只今高松水攻の御軍略を  
かく以て庸人の及ふへきとふれは引かすり貧  
道を本國安藝の安國寺毛利三家の扶助にて今日を過し  
しとすは筑前守何とすは毛利三家と懇意とやそれ  
ありは法印も働らかむと何りこれを見よとて一間と  
ころへ入しけり

陰徳太平記に惠瓊西堂とあり五山一派に喝食と云  
む七八才より十二三まで貴族の子弟を云また七八才  
より十二三まで姓名の正しきものを沙弥と云夫より  
十五六才侍者とあり知客とあり十七八より遍參し廿  
歳より藏主廿五六才て首座とふふ俊首座英首座と  
云卅歳より前堂或ハ單寮といふ三十四五より西堂と  
いふ人よりハ和尚と稱は四十歳より東堂と云自分よ  
り長老と云人より大和尚と云然れハ惠瓊この比三十  
五六あるへ

福原越後守和睦使者の事

并藤田傳八郎横死の事

筑前守瓊西堂を一間處に請し是見玉へや瓊西堂これハ  
高松の地形ありか祿より山の高さををかり置てさ  
くのちふかく乃如く水を仕かけしよもそや城中大か  
水あり川をいきて置とも清水長左衛門以下の者とも  
一人も漏る正如く水死はへしあそれある正如くそやと  
いそれし其外ふこれいりくの地形にあれはかしこの  
地形を備中備後の城に大かた其土地の高低を量らと  
て正も細小形をふたり是我國にて古く用ひし軍法如れ  
と今まで多く人の用ひさりしを我不思議不習ひ得て是  
を作里し其後よ方便をふりて攻る時を味方の士卒死  
傷をくぬしこれ天下を知へき大將の心なり一國一城を

知不との大將を敵味方の死傷を更よかるしすはくらの  
處よ目を付て天下知の軍ありを合点せよや西堂といそ  
れて惠瓊感服し心の底におもふ様おそろしき筑前守か  
るさてハ備後のまねら何國よても見ると直に地形を  
作る法ありと聞ゆは安藝國も心元形しと恐るくあた  
りを三れば信長公出馬の日割後陣小明智丹羽筒井細川  
前後引續きて押来るよりの道筋より驛路乃次第を記せ  
し帳ありさき筑前守いりよ西堂右大臣殿の軍ありをみ  
たりに人を殺さるるより小民をそころる地をむさぶ  
らに寶をよたふしせはたく王室を尊崇ひ朝廷をうやま  
ひ奉らんを本意とゆるねきは西堂よく心得て西川始

毛利の人よふかたるべし信長更ふ毛利と遺恨あり只近  
頃義昭將軍鞆津へ下向の後毛利三家の衆頻に馳走あり  
しより信長を以て寇讎とふされては是ハ鞆津同族の牢  
人衆ありさぬまを以て毛利三家の智者たちも自然  
とむの鏡をくもらせし事と覺も將軍いさく覺慶得業  
とやせし時御兄將軍の仇を復して室町御所を再興あり  
あふへく思召立れし御時を信長真先に進て日ありは御  
本意の如く三好松永を追却し室町の御所をもむさぶ  
は造營し奉りし御身の安逸よあらざるは信長  
を亡死へし御結構ありて終に御自身と京都を御退去す  
し海し志願れ信長更よ追出し奉りしふありは此處に



御胸ごむねに晴はける信長と弓矢とるへき因縁いんげんともにあるへ  
から然しかハ北きたを伯耆半國はくぎはんこくを境さかいと一南ハ當國たうこく兄部川あにべがわを限  
りて東西引分ひきわれをやく天下静謐せいひつの計はかりを廻めぐらさるやくと秀  
吉ひでよしのひつる由よしを不ふめかして両川りやうがわの心の底そこをさくら  
秀吉ひでよしも志こころらさるへ左ひだり阿あの我西堂われさいどうのため外護げごとる里  
何事なにごともあれ十分じふぶん馳走ちそうへきおれといそれ一ハ惠  
瓊けいしやう一議いつぎも及およびぬかこまりぬとて筑前守ちくぜんしゆの陣ちんを立たい  
て直ちか小早川こぞうがわの陣ちんいたり隆景たうけいと對面たいめん一筑前守ちくぜんしゆの陣ちん  
いりて見みしやく乃次第なつたひをわたり毛利家持城もちしぢの地形ちがひ大  
方おほ出來きそれを以もつて人數にんずをくそりてへ手取てとり如ごとく工夫くわふ  
をあらしめると尋常よつふの軍いんありあはれた一ハ不覺おぼえ不ふ

ゆへとも當御陣所たうごちんじよの地形ちがひなともあるかと覺おぼゆとわかされ  
ハ隆景たうけい何なにともいふ眼めを祓はらふりてこれを聞きたる一ハも  
のゆいそはやくありささもありぬへ一さも有ある先年せんねん  
三木みやぎの城しろを攻せめし時陣營ときちんちやうの敷しきやうといひ今度このときこの城しろを水  
攻せめせし地理ちりの考かんふとを以もつておもへハ不思議ふしぎの侍さむらいある  
元もと木下藤吉郎きんげふさとりいひさ信長の足輕あしがるあり一とかや夫  
り今ハ播州はりゅうの國主こくにしゆとして軍兵いんぺい三四万さんしゆばんを手足てあしの如ごとくは  
ふ正ただよ我等われら後援ごえんとして押來おしきまとも水みづのため隔へてられ  
近寄ちかよとさへかゝたくかく日數ひかずをむねしく過ます正ただ只筑  
前守ちくぜんしゆり心中こころよりを正ただよと云いふ歎息たんそくをるを見て惠瓊けいしやう聲こゑ  
を低ひくして貧道せんとう京きやうふあま一時筑前ちくぜんいまさ足輕あしがるふて面會めんかい

大問已下編卷之十八

一けるか手筋を見てくれよといふより能見ゆふ知天  
下の筋あきらめ見へや此節の勢を以て考ゆ今四  
五年の内ふはいりやうに成立可ややよう世は天下の  
權柄を取ゆ身ふもふ里てや哉計を知れぬ男ふてゆとや  
志りは隆景實もく何様凡人ふくぬ武者ふりとやへ一夫  
よ付事のもしめをおもふよ信長ハ京より東の人なり當  
家ハ京よりふふか西ふて中國のものなり元より信長  
と親一りか恨もふ一只鞆ハ在江將軍御内の衆の彼  
是いそるより終に信長と弓矢を取め一とあそれ信  
長とハともかくも筑前守とハ入魂一と共天下静謐の  
計策をめぐらゆそやとこの程存付てゆありと云を吉川

聞てさうやく筑前守の冠山忍峯日畑かゆららか峯等ふ  
て軍の掛引我等ウ心とえふあよかそりそ志りも士卒を  
ついやさむまよと圓きものそ一あさか如く川くり  
首いりくり尾と見分たさ進退作法誰も學ひ誰も習ひ  
一か變化自在龍の如く蛟も似たる筑前守何様御坊のい  
える如く此末何程取のなるへき不ともえかられぬ侍  
あまの川れふ一とも是ハ和を致ハ順ふ一て是ハ違ふハ  
逆なるへ一といえる時安國寺得たりとさんハ筑前守  
の陣中ふて見てゆ信長下着の日割も遠あらし見へて  
ゆそれゆそ形は明智筒井細川丹羽池田追々下向の驛  
路までた一あよ記一志帳面もいひきといへハ西川心中

平定むるにありしといえれり  
 吉川も成程隆景  
 のいそる處至極の道理ありとて  
 福原越後守貞俊を安  
 國寺小添て筑前守の陣中へ差越  
 和平の議を入りてハ  
 筑前守浅野彌兵衛尉をして御口  
 狀の趣早く京都へ遣  
 一右大臣殿の差圖次第御挨拶  
 へりと答りてハ安國寺  
 志きりに對面を請りてハ御坊と  
 一軍の外の交りて福  
 原ハ毛利家の使者也我ハ信長  
 の代官なり我心よて和睦  
 の義何とあるべきや京へ遣りて  
 後と云依て福原安國  
 寺立歸りかくと云ハ西川又大  
 肝を消さても大膽ふふ  
 筑前守かふ弥く以て我等り敵  
 あり今一度安國寺ゆき  
 て入よといえれりよより再度  
 安國寺筑前守の陣中へ

太閤已六編卷之十八

小おもふ様なれが實もあるか  
 筑前守の方へせ加  
 する勢定めむせ方ふ及ふ  
 一是ハ早く信長加勢の  
 着ぬうちと和平を取結ぶ  
 方然るへ一安國寺幸小筑前と  
 入魂なり一骨折ゆへとあり  
 一時毛利家の諸物持ともせ  
 め一合戦一毛利の弓矢を見  
 知せむ後と和議を合せし  
 るくやとつふを隆景聞きい  
 やくこれハ小利大損といふ  
 中の筑前ハ足輕立よりハ  
 大軍を引廻し鎌倉以來  
 取傳へたる當家と只今牛角  
 小對陣するありこれさへ  
 我等り聊りまけたるにあ  
 るや此上一合戦一少し  
 にてもふぶき弓矢を取たら  
 んふハいよく當家の為長  
 き耻辱といふへ一よも斯  
 ふも當家安全の計策を早く  
 和

來り段々と解一ハ筑前守やうやく納得一さらハ誓書  
を取交さんと云ふあり志と也

此条毛利明智と約と一正有といひ又ハ二度め和義の  
使五月廿八日ありと云ふ大事實たかへり又毛利家備  
中備後伯耆を割る信長へ獻と云ふ誤也伯州半國備  
中ハ兄部川以東と云ふ正説と以又藤田傳八郎六月二  
日の晩景ニ京の妙心寺を發し三日の夜戌刻ニ備中高  
松に至ると云ふ京より高松迄五十八里半余の處也十四  
時の際ふせハ一時凡四里少余ニ當る又藤田を捕え一  
ハ大谷神子田仙石三人也と云明智の狀ハ狀箱ニ收む  
と云明智の狀の詞をのれ共ニ偽也依て改作也

重修真書太閤記六編卷之二十八終

重修真書太閤記六編卷之廿九

毛利家三度目之使者の事

并秀吉大量を顯る事

羽柴筑前守の陣中ニとる飛脚の殺害をられ一を不審一  
の書狀の趣意を如何なる正とせんとそらくハ評判ふ  
一けるハあるひと京都ニ變のありけらんとつもの  
あきはあるひと盆にあはれこれ左右大臣殿御事あ  
ましけらんと心々ハ沙汰一けるうち其夜子刻をり  
ハ長谷川刑部卿法眼宗仁の許より飛脚到來を是ハ筑前  
守ハ初て宗仁と入魂ふり一ハ西國發駕の其時ニ京都

の大小事通達たのむよーたたく約束し置けるうへ逐よ  
天下を掌握し餘威三韓大明まも鳴響る不との筑前守  
形れハ花こーももの、あゝるをーる程の人を只人あら  
しと目を流けつゝふより宗仁もこきよあゝしよらん  
正ハ大樹のわけよ立よるゆとたためもしく思ひそ  
めーハ本能寺をのわけいゆると直よ飛脚を出し立川  
色とも宗仁を小身おし召仕ふものも多あらねハ川  
もく西國へ下し馴し、小者を使とせしよ此小者暑さふ  
路をいそさのね藤田よりするかよ引下りて著しあうさ  
れとも此まおの月ある筑前守の陣中へ度く下りおれて  
羽柴の陣の横目も大方見覺しもの形から作法おれハひ

しくと取まきて何をの燈といへハ長谷川刑部卿の使と  
答ふさハ色書状り口状あと問書状も口状もあうといふ  
依るい川もの如く浅野彌兵衛尉これをめし川色小市郎  
秀長の陣小いたり夫より本陣小ともおひ書状を取筑  
前守の前よ置ハ筑前守これを讀終り飛脚小黄金十両あ  
らへ次よ加藤虎之助を呼出し長谷川の飛脚を三里を  
里送り出しゆへとあましハ虎之助承里ゆとて飛脚を  
召連吉備の中山を打越岡山の東まろつれゆき爰て立  
まかれ別かへしあハ宗仁に使のおもむきも知人更よ  
あゆりゆりされともをの川と陣中またれゆふと形く京  
都ふし明智光秀謀叛し信長公を弑しさいらせしとも

云あるひも安土の城を焼れて信忠両公とも御焼死あり  
しふとあり、これにて沙汰をるよ、浅野彌兵衛言上し  
けれハ筑前守打うる川ささもあるへ、とて浅野を本陣  
の留守のこされ蜂須賀彦右衛門黒田官兵衛兩人を先  
またてその次々金の瓢箪の大馬印をまづ先におしたて  
其身を越後布の帷子の短きふ一重帯して朱ぬり鞆の大  
脇差來國次の作二尺三寸ありけるをたく一腰さし悠々  
然と塘の上を打めくりさものとやり歩行の体日比よ  
う猶もふく、其時おるふ、快晴みて土さへさくる炎天  
のありさいとを以たさ、あら陣屋くの前おして水を今  
朝よりいかに増え、随分念入油路を照追付右大臣家

の御出馬あるへきや、但今ハ、えや水も城へのりたれ  
ハ、いり清水長左衛門武勇世と云ふれたりとも溺死  
ほともあるよ、さへして其上にて廂山陣取たる両川  
を攻め切ちら、巖嶋へ参詣し、はいては防長まで仕置  
して織田殿の御先祖の御由緒ある阿彌陀寺へ御参りあ  
るへきを、其の時八面くも長陣の苦勞をえら、快くふ  
木の石灰をたきて、菘やきの茶碗もて薄茶をのちと向津  
のおくの入江の苔をあふり吉見川の鮎をくらえ、へき  
岩國の半紙杉原山口の結のこ紫深の色もよ、押かけ  
ふとををめさせ、土産をもち、程ちか、と兵士の心を  
あて、めつ、事もあけ、巡見あれ、昨夜よりの風説ハ何

ものりいひ出ー遠説とあるへしちあさささかよて  
も御事ありしつわ誠もあるがらハよも筑前守あ  
体よてゆるくそハあるまーきけりと先をーの神子田  
半左衛門仙石權兵衛大谷吉松ふんどまても實上方何  
ともふきあらんさけくハ如斯まて打とけ緩くとハある  
まーきことおもひーハいれままとあさもあるへー  
さもあらんと少り氣を取直し一同まおもを以上る関の  
聲この山谷を水海の浪の響お和まーて天地も既も崩る  
あ疑計りおひたー筑前守ハ長き堤をめぐりえ  
本陣も返り入ーあ後毛利の使者福原越後守安國寺と共  
よ入來何うて淺野弥兵衛も面會ーいよく和睦の御約束

を定めーへく人質を御望おゆる誰おもさー出にへ  
ーと云爰は於て淺野弥兵衛使者の口状の通り披露お  
志かハ筑前守其者とも是へ出ーゆへといえりにより  
蜂須賀黒田堀尾大谷神子田仙石青山松下其餘の面々膝  
をふらへ袖をつらねて軍門の側も列をふー本陣の正面  
お筑前守常よりゆるらつと敷皮も坐ー太刀も弓矢も  
身もそそ例の朱さやの國次をかり組の帯もさーらつ  
ろけちり藤堂谷脇坂糟屋三加藤福島石川片桐平野以下  
の歴々いつれもえるか遠く居ふらひたり淺野弥兵衛  
奏者ー福原越後守安國寺のよーを披露ーける時越後  
守かーこまりて隆景元春かく中と中付てゆ兼て中上

一通り右大臣殿と毛利の者と元より遺恨ハあるへき  
様も形く左てハ弓矢をとる因縁もあくゆ處鞠津伺公の  
面よりヤにつれ終るゆる正に及ひまゆへとも民の為  
國のさめ費多く益あくゆあそれ御諒の如く御塚を定め  
あゆく御好むをむをひ一日もえやく天下安全万民快樂の  
時とあゆえん正を庶幾ゆりまづるあより御和睦の御  
約束を定め度ゆ人質ハ誰おてもとヤ上る由述終る  
まかりらを席あつけ筑前守の答をまちける時筑前守兩  
川の御口狀つふゆ承知し終ぬ秀吉まおいても元より  
兩川の衆と親しき間あら祓ハ恨まん種もあし右大臣殿  
とて毛利家と東西相あたる里中路百餘里不及へ里

何とて疾といまんとあるへきされハ今度の弓矢をやめ  
兵士を休息せしめ百姓町人をのく其本業まつかむなく  
思しめさせんとも疑ひ形くゆへともいゆにせん去二日  
京都本能寺小於る右大臣殿父子とも明智日向守かめふ  
生害ありてゆといまれく落涙をふれり越後守も安國  
寺もなしめ此大變を聞きても大丈夫ある筑前守りか  
かゝる騒動を知らら優々と對陣し昨日も今日も堤を  
巡見し敵をいりのかまともせぬかつ我等ハ敵の使者  
あるにうち明かかくいまる肝のふとさこ心中ふふか  
くかそれかどろき何ともいもてかしまる中ありて  
筑前守聞る通り次第ありか移るハ京都へ言上し右



大臣殿の御氣色ふよりて和平を定むへく存し定めてゆ  
 ひに右大臣殿かくありむひてハ御旨を伺ふ人きよあ  
 らぬ去とて和平を破り兩方の士卒を傷け百姓町人をく  
 る志りんともまじ本意あらぬ筑前守ハとてもかくて  
 も是より上方へ引かへし明智を討て右大臣殿の御恨を  
 黄泉の下に休めやへきにてゆ但兩川の意は筑前上方  
 へ引かへし跡を去るやとも中さるまじくハ存ゆへ  
 とも田舎武士の弓矢をハ存せぬゆあ由罷歸りて有の  
 終に中さるへし其上は筑前と和睦を取むを中さる  
 かなしゆも又其時の次第よよるへしとてをらくとを  
 かきしるハ越後守も背に汗をあゆる心地して我々を田

舎武士といわれし大膽不敵のふるまひやとかもたは  
 顔を上げたは筑前守の眼さ電光の射よりも猶をけ  
 く何とやらおそろしけれはたひれふして禮をあら  
 けりまにハ兩川よきけ又もや參上仕らんとおそろし  
 陣門を出る毛利の陣へかくりたり浅野彌兵衛以下きも  
 をろぶかふる大變をされへハ御かくしつりしを敵  
 方へをやく御知せありつるハ近比御無念の至よやとい  
 へハ筑前守いやとよ今追ハ右大臣殿の御心をかひて十  
 分の軍もあらさるし是よりハ筑前ハ七八歳の比より  
 をのつうら心よ得たり軍法を以てま手始も毛利三  
 家をきり取て見まへしそあらおもしろの世間をやと云

あつら酒樽を引よせ大盃をめて六七盃をかきあげ枕引  
よせ臥よりちやく大ひき雷のまゝ羽柴陣中三万五  
千人いつせもく聲をそろへ今もちめぬとあつら筑前  
殿の荒涼あるとよかてハ一定天下の武將とありあふ  
へしと加藤福嶋あんと若き人々沙汰しあくり

小早川左衛門督隆景全保の計を論ぐる事

并和睦密見の智謀の事

摩尼帝尺山をハ毛利輝元朝臣の本陣とし吉川元春小早  
川隆景ハ廂山に陣を居荒垣ゆきせて用心嚴重に見えた  
まけり爰も福原越後守安國寺兩人と筑前守の口状を聞  
て一度とつこひ一度ハあやしとまるとあそれつゝ兩川

の陣所あつら筑前守のひひ川子終にのへしハ隆景  
元春川くくとこれをきき志えし何りと大息つぎ隆景  
川中されりるをいり越後守其方ハ故陸奥守殿の弓矢  
をさらせり御ありをハ能知内らん筑前守りのまの軍  
の容子を見り聞も見るああまりによく似たるものや  
ふ一年雲州へ出陣ありし井上一統を加勢あまねき既  
ふ兩陣相むむ期又いたり加勢の井上急又発病しそけ  
れる程の手をえて引返り尼子方あま井上陣のた  
きたふを伺ひ志らんだめ其陣あむりあまを射あけ  
ふと奥州その手あまをむむひ大音あけあま井上河  
内守父子兄弟あ打あててあま一處あれとも河内守あ



れハ我く二人よりハちと弓矢切者とおもされたり勿く  
思慮ぬく切あり毛利の弓矢難を付ん正得たる有り  
り云々云へからに其上信長の横死をいたす一けれとも  
筑前をてふ三四万の人数あり今まで信長の加勢あくて  
急この高松をかくの如く水ありそるく後誥有とも我  
等ふ手を出し正をさせしハ能々思へハ信長あく  
里一おそ筑前守かためふ不幸の幸とつあへし明智日向  
守ハ軍畧智謀とも筑前よりまさる如く世もて  
一川をとも正しく人を指揮する正ハるか筑前ハ  
おとろくおろえゆそれハ心もよく和睦を破り筑前陣  
ふせせ向ふより川より戦をそむへきや両頭蛇の如

き人数のくろり方い川く首あり川くや尾右をりて  
は左より援け前より川後より包む變化自在風雲  
鳥蛇龍帝天地我等ありあろよとおもひも付見あく只今  
馳上り明智をろろ都に旗を立て右大臣殿の遺跡を  
定めふハ誰かハ是を天下の上將とあふぬものある  
べきや和睦の義違存あるすきこといそるにより隆  
景へりよも仰の如く今度信長公の傷害を筑前守の天下  
小旗を立て開運のそしめさされ當方よりいよく和  
睦相違あるまよき由を中入さて和平の後更筑前守馳  
上るぬらハ當家よりも加勢と号し一手の軍勢をさし  
へ下へハ是ハ毛利の義を重んずる處を世上よ志めさん

うためなり次々万々一明智軍強くして筑前守負るふ  
 らハ其勢ともハ忽ちうら切して秀吉を打とる明智一  
 味をへりぬ又筑前守勝たらんハ毛利の家のため  
 大なる功とぬへりと存れとも諸侍をよひ物頭  
 中の了見も一こにて筑前をたやく打らるへくお  
 もる謀めやゆへ遠慮なくからひめされよとい  
 えるれハ一座互目と目を見合ふ此高松の水を切おと  
 して傍輩の溺るをさくをくふとたかくありぬり  
 小して筑前を打得へさやいて追かけんとをわしもの  
 も今更に我を先よむむへれといふものぬく皆黙  
 然として辭ふ元春のたより様隆景のそからひる小處

まよおをさよあ一當家永世のそかりとぬるへ一この使  
 をは誰のかり付然るへからんといふれ一ハ赤川左京  
 亮兒玉三郎右衛門國司右京亮桂左衛門大夫同民部少輔粟  
 屋右京亮桃井隱岐守草薙次郎左衛門内藤越前守乃美兵  
 部少輔同少輔四郎渡邊左衛門等をよめ歴々居るらひ  
 たれとも誰あまき某罷向をんとつふ人もぬ一吉川小早  
 川うち廻しく何誰をり此使よあゆへ一と其人をよそえ  
 らされけせ

一書ふ惠瓊兩川小筑前守かろふ天下を知らぬの運  
 を開くへ一殊々六月火の運衰へき金運や盛ふらん  
 と光秀も火性筑前守も火性之者なり光秀ハ東

あり東ハ木なり筑前守ハ只今西あり西ハ金也東の  
木光秀の火を助けんとをれハ土用の土木を克し西の  
金又東の木を克しつれハ軍ハ秀吉の勝ヲ相違ハ  
一と占ひけ程ハ西川も誠ニ然もあてぬへ一とて弥々  
和睦ニ事定て一といへ

又一書ハ毛利少輔十郎元綱桂民部大輔二人筑前守の  
許へ入質子をくられ一之秀吉是久留米廿一万石を興  
ふ是元綱ハ後ニ秀吉と云秀吉の一字ニ元就のハ男也  
朝鮮の役ハ七番組小早川隆景大將あり久留米侍從  
秀吉立花宗茂高橋筑紫二万一千七百人と也

重修真書太閤記六編卷之廿九終

重修真書太閤記六編卷之三十

内藤越前守勘察使の事

并羽柴殿和睦承知の事

毛利陣中あり筑前守への使者福原越後守安國寺乃外ニ  
誰を添へき誰り往へきと諸侍諸將ハ評定あり川を共  
大事の使節ヲ程ハ某罷向えんと云ハの如く互ニふらミ  
あふ居たりけるハ内藤越前守廣俊ハ然るへ々れと  
勧めハハ何ぞも尤然るへ一と一同ニ下けるふより兩  
川ハも何様此人より一からんと決着しさらハ越前よべ  
とよはきけり越前守年長ニ不強仕を過たれとも智謀

第一の人にて文道も武藝も大形西國ハ比類ナ  
 叔石大臣家靈前へ奠玉へとく沉香一筐砂金百兩白紗綾  
 百卷燭燭千挺を持せ内藤越前守を以て悔の口状を述さ  
 せ其次は福原越後守安國寺ハ和睦の使として蛙の鼻の  
 陣へさし向しを實も天正十年六月七日の未明なり  
 流布本五日と云然れとも六日清水長左衛門自殺して  
 のち和睦調ひし形れハ七日とある本は従ふ  
 浅野弥兵衛尉出向ふ福原安國寺ハ和睦の御使なるへ  
 今一人も何との御使もやと問福原答けるハ今度和睦  
 を取結ひ以上羽柴殿と西川とハ隣國の間柄あり吉凶  
 共好を通し交を厚く成へし然るも是からさるる古

大臣殿逆臣のためは横死あらせられし他國もても賜  
 を断のれもひをふり筑州の御上りて何ふと悔  
 おかたらん推量は言葉なり當家も於て弔いくさを存立  
 といへとも路次をふりし毎事合期いささ依て聊  
 の加勢を出せへきあての進退の段頼ま入の旨輝元をよ  
 ひ小早川隆景吉川元春一同あつて承るる如  
 くハ近日御上浴ありて明智御退治の上右府の御葬禮以  
 下定めて御執行あるへく其時の御料もと存し輕微  
 の両三種を呈奠しよを最のとやり演説せしハ是  
 を聞ものさけり鎌倉將軍家政所の別當たりし因幡守廣  
 元朝臣の血脉たえ以中國の大名たる毛利三家の心のそ

この總おとく仁義にぎぎをえるへ一使節しせつの周旋しゆせんありく都みやこをのり  
一志しといつれもく耳みみをききし一て感心かんしんを志しえらくありて  
筑前守ちくぜんしゆ白しろき惟子ただこの鈍色にぶいろの麻あしの上下じやうげ著き座ざ上じやう又また出内藤いでないとうの  
會釋くわいしやく一ひと只今ただいま承うけたまえる三人さんにん衆しゆの懇詞こんしよ一其誠心そのせしんを流ながくさ  
れよ一糸いと一度いちどを涙禁なみどめめかたく一度いちどハ悦よろこひ窮きゆうま一なくゆい  
りふれば右大臣みぎのちじん殿元とのんより何方どなたへむけゆても地ちをむさふ  
り寶たからを私ひそされまゆひつることを知しるの形かたちくゆふとま  
正ただに口くちお一くさておを落涙らくなみとめゆめてゆふれ然しかるお  
三家さんかの衆しゆ此處このところを能聞よくきけられこのたび和睦わくごくの義ぎよくの  
ひ兵士へいしを休息きゅうしせしめて矢玉やたまの中ちゆうにいたと一ゆる農商のうかうを安やす  
くしておのく其業そのわざをゆとめむるを天下てんか静謐せいひつの基本きほんと

へくま正ただに以もつて悦よろこひ入いり次つぎは秀吉ひでゆき早賤はやせん凡下ばんげの身みは生  
れを右大臣みぎのちじん家の御恩ごおんより侍まへとありしたは過分かぶんなる  
は侍まへの大將たいしやうとあり一國いちこくの成敗せいばいをさう行いひ四五万四五まんの人数にんず  
を進退しんたい一累世いらいせの貴族きそくおておえしゆは三家さんかの衆しゆとゆる  
交まりをおしゆま正ただは意外いがいの幸福しあうゆきりゆくは越州えつしゆを  
面々めんめんもてゆゆへ秀吉ひでゆきり大事だいじの御客ごきやくゆりと聲嚴こゑげんゆい  
それゆハ浅野長政あさのながまさゆりて越前殿えつぜんとのんハおふたへお  
えと一ひと間處まゐは案内案内一其跡そのあとへ福原ふくはらと安國寺あんこくじをさしゆね  
き秀言ひでゆき大音おほねおて和睦わくごくの義ぎよく相違さうゐなき音ねはふさふ承うけた  
りゆハ三家さんかの衆しゆの心腹しんぷくゆ正ただにたのもくたゆえゆ左ゆ  
うハ天下てんかの泰平たいへいあらん正ただ日をかぞへて待まちゆハ一三國さんこく



のとも入質の事も其方よりの了立なり其始末如何  
と尋られしハ福原越後守消息の箱を捧けて是を長政  
みつけ長政これを筑前守の前よさし置筑前守もつか  
ら封おし切蓋をひらき中より誓書を取りしこれを読  
終り輝元元春隆景三人の名判を改めせし血の色を  
正かしこれを見定め元の如く巻納めておしいたくさ  
三人衆乃神文たしあは落手し畢ぬ福原安國寺度くの往  
復大儀千萬なり志かりぬら両家斯の如く和睦の上ハ  
山陰山陽十六ヶ國の百姓町人ハ云ふ及を以て武士よきも  
枕を安く朝寐し飯の強弱をの論を世とぬりぬへ  
しあはめてたやといえれしハ諸侍一同お万歳千秋樂

未央とよはえ多聲ハ六万餘人山岳まひびびきておびたし  
其後内藤越前守を呼出し只今屯てお三人衆より誓書  
を御目たしの上ハもを両家一家の好を厚くし永く兄  
弟の交をわたく結ぶへき今日をえしめぬへハ一獻  
進出へくぬたし今迄弓矢を取合し敵味方ぬり秀吉の  
きて進出へしと云はく大土器おさくと引うけぬ  
とすしすし越後守おさし次の土器をおさしくのさ  
安國寺おさし又別の土器とりて今を此瓶子子細ぬり  
し越前守をぬられぬへとて是を進む越前守膝ぬりよ  
り御和睦の上ハ主君の御土器ふてしとて筑前守進む  
れハ此上をさて筑前守土器とり上ぬり越前守今より

大内記六編卷之十一

日

のち毛利殿九州へむかひて朝廷を輕蔑するものを征伐  
あらんとさし加勢として秀吉の手の者ともをさし下し  
ゆへしといひふら其土器を越前守またぶこの時越後  
守土器を手お持ちといふせましと案しける体を見むひ  
その土器いさ一獻といふれしハ酌の者瓶子をさして  
立上るとさしたるに立たる太刀を取いて引出しめ  
へしとて越後守おあたふ越後守土器を左に置太刀を取  
りおしいたく筑前守をれハ鉄よくハ関鍛冶形秀吉  
隨分秘藏なれともこの事との悦ひよ進上ゆといふるれ  
ハ越後守もまことに嬉しけよこれをうちふめ腰お帶し  
御禮申は次は越前守へハささよりかさうたる緋おと

の鎧の綿上とてこの鎧を秀吉毛利殿に見參の時着用  
せんため支度してゆひし今を鎧きて其詮なくゆより  
て御邊に參らるくとして内藤おあたふ内藤かこまり  
鎧の引合より手を入射向を押えて元の座お着たへお  
置土器をとりて毛利家かやうお御親しくあゆ上ハ某  
とても鎧着用乃日ハあるゆしゆへとも仰の如く九州  
へ向ふて軍仕をゆえん時只今賜るゆ此御鎧着て三韓  
大明まで御威光をゆ、むかひゆへといひし詞の末  
はいよ文禄のそしめ朝鮮の軍お着たりし鎧とゆわさて  
其次は安国寺この程ゆの骨折を勿く言葉よつくされ  
は是れ今日の慶ひよとて黄金十枚を手ゆ切取て與え

らふ安國寺肝をつふし是ハ過分の御引出ものと戦ふく  
 頂戴一座を立んとおし志時黄金五枚とり出し次は三条  
 橋のかこひおろ手筋人相まらひ一時の謝儀ゆくと  
 て取をしかハ安國寺總身お汗をかいて志里をけハ内  
 藤福原一同お輝元元春隆景の待とをしくたもふへきに  
 御暇をといへハ成程さも有へし長政用意の品く御使  
 見をよとありし時長政座を立く白木の臺を五川置から  
 へ越後布五十端近江晒布五十端板のもの五十巻結綿五  
 百把黄金五十枚を取出し是を追付進せりよく心得て  
 披露しゆへやと云く筑前守を元の座へ立かへる三使陣  
 門を出んとする時よく飼たる馬三疋よき鞍置て引から

へたり三使まゝたもひの外のとあれハあきれをてさて  
 も荒量なる筑前殿のもてぬしや實は不思議の大將かふ  
 と一禮して持乗たりけるか何とてたもひけん越前守馬  
 より下手綱ゆりかけ七寸取く六七間あゆまを東に向く  
 をかし頓て打乘廂山の本陣さして急ぎけり  
 流布本此段内藤福原の事實舊記不違ふ処おし依て  
 これを改正し筑前守の誓紙ハ實は此方より先遣ハ  
 毛利の誓書を後より來れるこ  
 毛利の加勢軍配相違の事  
 并筑前守一騎駈上途の事  
 内藤越前守立歸り西川小向ひ筑前守とヤ男ハ長五尺

満ちたる黒く頭ちいさく左の頬は黒疵三川り四あり其  
容儀体配あかく人のかいらたるへくハ見えはへとも  
眼中の光曜電の如くきらめく度はおもを肝ふこたへ  
さし何さぬ凡人おもゆる一次の云聲のたさく小  
児もふりくへくおもそれゆりまとものを沙汰せら  
る時ハ其聲鐘のよくきく人耳をふさざんと誠不思  
議の侍ふはたてて對面いさして御口上をすてはへハ三  
家の衆乃左様も仰らるるを右大臣殿の聞ふ入はてと  
中されよくと泣れは其後加勢以下の正深く悦ひやさ  
れをこしも偽らしき處見えは小早川の仰らるる如く  
明智不切かち都旗を立玉をんと相違あるましく覚えは

左ゆえんハ毛利家第一えんの功とあり可や正鑑あか  
けとくもりぬくは兼てハ其容子あより飛つてとも  
存し川めくはひり其前へ出てハ何とぬく身の毛もい  
よたつるわうおそろしくして手も足も無り如くおいと  
中をハ福原越後守のこまりて御和睦相違ぬく調ひは  
上ハ少輔十郎殿并ハ桂民部早御越あるへく追付あ  
るたより使者さいるへくいとひも終らぬ處へ筑前守  
の使者森勘八郎同兵吉かの品くを取もたを外ハ柳五荷  
かき川ら初と斯と案内を福原安國寺奏者して両川の  
前へともさへハ森筑前守の口状をの山隆景承る此由輝  
元へ遣しゆえんおえし休息いたされはへとて種こお

太閤日記六編卷之廿

もて取らして渡邊左衛門を大將として五千余人を加勢  
のために出立せしめ毛利少輔十郎元綱桂民部少輔を  
人質とし其外鉄炮五百挺玉薬三荷弓三百張矢箱二荷長  
柄三百本旗三十面を差引以て浅野蜂須賀黒田三  
人たち出て加勢をらひし武器を請取少輔十郎をは筑前  
守のかたえらへよひて桂民部をよひ出し人質と仰ら  
れしへとも秀吉の心は左もゆを以て我等生年四十七歳子  
と云ふのふくむへハ秀吉の子の分おておえしハおえ  
せよ小市郎と同し處に住むへとて秀長を呼出し少輔十  
郎冠者とし一川ありて軍志多へ中國の大將あり上方の  
武者ありをも知むへや民部のかたへも付添てさしハが

ら死ふといえれしハ兩人とも案を相違しつらさぬ兩  
川のいそれし如く底の志禮ぬ筑前守た一人はあるまし  
と始ておもひ知たりけり其後渡邊左衛門を呼出され遠  
方迄加勢として御越被成の事近比過分存いたし一人  
數組并お前後の次第をへし浅野彌兵衛黒田官兵衛蜂須  
賀彦右衛門より付ていへハ三人の定めし御付しへと  
されやかき三人を呼出し毛利殿より加勢をさしこされ  
ていよるし組にけ御手柄のあはる禮の様いたをへく  
いと下渡しけれハ三人承り渡邊殿ハ御苦勞するか  
うぬくしへとも上方より武功をあらはされしへハ西國  
より軍いたされしよりふりふりて人にも知れ世の

大問已下編卷之十

語をくささも聞えゆとやさは渡邊いゆも田舎をいふ  
りたけ都はまた格別の事ゆいゆに御差圖次第と  
りけるあより浅野黒田蜂須賀うぢ字あゆき五千餘人を  
二十小分五十人づ組日けて先陣後陣とわけへたて六  
万余人の其中へ割入たれハ毛利加勢の五千餘人れもひ  
の外おとろき合渡邊左衛門是を見て浅野黒田蜂須  
賀に向ひ田舎さあらひの不知案内者より此者とも一  
緒に我等へ御預被下ゆとやとけは三人一同より  
様これハ筑前守かり秘て付たる器水の陣法あき敵  
打ちひひいゆいゆの備おも毛利勢を加えゆへ敵  
方あきこれを見る時さてもく毛利勢ハおひら一の正

と見るへくハ然れハ毛利家の御眉目ともありゆえんり  
又味方小取てあの手おてハ切あちりこの手おてハ切  
まけたりふんとゆふとゆふため組日けてゆゆの毛利  
勢を五千餘人一手おいたゆへハ軍の用に立わたくゆ  
へりて裏切ふんとわけられんと人々安心いたさゆゆ  
よりていつもく他國の加勢をいやくの如く仕るハ筑前  
守の得たる処よりとやけるあより渡邊左衛門ハゆて  
の計策をそやさとられハかと舌をふるひさ怖おそれ定  
めのまに從ひけり其後筑前守ハ荒木平大夫を使と  
て毛利の陣へさ遣ハ乃美兵部少輔を尋ねいたハ筑  
前守ハ和睦とくのひその上御加勢并ハ武器をも賜え

太閤記六編卷之十

り段々尽一かたくりよりて御塚目小浮田七郎兵衛岡  
越前守明石飛驒守福田五郎左衛門権原監物長船紀伊守是  
等をのこし置い何事およらえ承るへくは是へて京  
都より心静ふや入ゆえん其節御さむりゆへかーと  
さとの事おいと述て荒木を其後引かへ是夫より筑前  
守八燈と名付し陸奥たちの名馬の長八寸おありてい  
また五歳迄名猶遠きかけ足の馬おうちのみ蛙ヶ鼻をそ  
せ出しおへハ馬を元より逸物あり乘人ハ達者引わけく  
うゆおとよ折節大風大雨なりしゆとも是こしゆいとを  
以備前の國上東郡沼城まで三百五十餘町をたぐ一時お  
そせ付たりしゆ雨おまをくつよくふりおさるしゆかハ夜半

そゆりに仙石大谷神子田をめされ此雨よてハ道くの川  
川出水しゆてゆこし場難儀あるへしゆねて貯おきし髮綱  
を用ひて船をゆき諸勢をまたはへしゆ付られしゆ  
より仙石大谷神子田三人夜中より出立し川くの船ともを  
はあきて路を作しける處へそや筑前守乗つけてしゆく  
もあたり精出しゆへと褒美しあから馬をそをゆひしゆ  
より其日の晩景は姫路の城へ入ゆ今日ハ十七里餘の  
慶也本丸へ入ゆ處は丹羽五郎左衛門の飛脚お逢ゆひ  
けるゆ丹羽より大坂おき七兵衛尉を打取しゆかとも其家  
中二千余人明智とひつゆ成て京都へそを加ちぬ扱を  
筒井も何連り定め難し依て神戸殿一人の力めて京都迄

大月己六編六十一

切上る正また一早く御上りゆて御差圖あれとり越こし  
筑前守飛脚ひきやく自身みづかみあたる様やう只今ただいま爰こゝあてせはけけり  
後れのち一ものを待まちけりて明日あした明後日あしたの内うち尾崎おしきあてけ付つけ  
ゆへ一其心こゝろ一待まち多おほへと丹羽殿にのえのどのよりへきことして飛脚ひきやくを  
返かへし夫おれより又御着ごちやくゆへ川大久保明石田井畑生田西宮成  
尾おしの宿しゆくくを經へる尾崎おしき迄まで廿二里にじふにりの間まに馬うま馬うま草くさ草くさ鞋かぶ馬うまの口くち  
洗水せんすい屯とんへと食物じき路ぢ傍はた小持こもち出で置おけりとを觸ふられたり元もと  
より筑前守ちくぜんしゆの作法さくさふと兼かねて往來きやうらいの宿しゆくくへ觸ふ渡わたし米こめみて  
も馬うまの飼かひもても札しやくを渡わたしと是こゝろを請取うけとり正ただ不定さだめ物主ものぬしを札しやく  
もち出でて勘定かんとの役人やくにんより價あひを濟たむ正ただにあしりの是こゝろハこ  
重修真書太閤記六編卷之三十終

### 三 都 書 林

三條通升屋町	出雲寺文次郎
心齋橋通北久太郎町	河内屋喜兵衛
同 博勞町	河内屋茂兵衛
同 筋本町角	河内屋藤兵衛
日本橋通二丁目	須原屋茂兵衛
同 二丁目	山城屋佐兵衛
同	小林新兵衛
芝神明前	岡田屋嘉七
水石町十軒店	英子屋大助
大傳馬町二丁目	丁子屋平兵衛
横山町三丁目	和泉屋金右衛門
淺草茅町二丁目	須原屋伊八
筋違御門外松籠町二丁目	紙屋徳八



